



嫉妬深い
職場で交際
30人の同僚
発表した途端に、
(男)ガ一変して.....

■ あらすじ

男臭い技術課の癒しとして、紅一点の柿崎翠歌は上司・部下を問わず（性的に）慕われていた。

そうとは知らず、ある日に翠歌は同僚たちへと彼氏の存在を公表してしまう。

途端に凍り付く男たち。自身が、どれだけ男性社員たちから愛されていたのかを思い知ることになる瞬間だった。

■ 収録プレイ

二十人からの輪姦、三十一人からの輪姦、ぶっかけ、全身フェラ

目隠し、NTR、中出し、不貞行為、潮噴き、尿失禁、マツトプレイ

■ 人物紹介

・ 柿崎翠歌 かきざき すいか

34歳、150cm、65kg

巨乳。技術課で唯一の女性。歳より若く見られやすい容姿だけど、本人は自身を高く評価しておらず、部下たちからはチビデブのオバサン扱いされてるものと思いついていた。

実際には、若いイケメン社員さえ虜にする程の魔性持ち。基本穏やかな性格でも、意外に豪胆。男らしい一面もある。

ただし酒に弱い。耳舐め、視線、羞恥プレイにも弱い。赤面し易いタイプ。

男ばかりの職場に十年は勤めているにも拘わらず、未だに異性慣れしていない。男にチャホヤされると、すぐに真っ赤になってしまう。

・大宮波瑠 おおみや はる

19歳、175cm、天才肌、中卒

天才的な頭脳の持ち主であり、中卒ながら狭き門の開発部に勤めている。チャラそうに振る舞うものの、元・引き籠もりで女性経験が皆無の童貞。入社してすぐに翠歌に惚れてしまい、日々猛烈にアタックするけど、本人からは子供としか思われていない。

・瀬戸名月 せと なつき

32歳、195cm、大柄、筋肉質、巨根

会社のバスケットボールチームに所属している。

男根があまりにも大きい。

ズボン越しでもハッキリ分かる大きさにコンプレックスを抱いていた。

ある日、翠歌に「30歳になってもお互い独身だったら試してみよう」と言われてから、翠歌一筋に生きるようになった。

・松川明良 まつかわ あきよし

26歳、180cm、インフルエンサー

SNSの総フォロワー数200万人の有名人。ダンス、歌唱力、社交性に長けている。大手の開発部に入れる程の技術力もあり、とにかく多才。

女性からの人気も凄まじいが、内面を見てくれる翠歌に傾倒している。嫉妬深い一面もあり、翠歌の彼氏持ちを良しとしていない。

・長浜冬治 ながはま とうじ

31歳、開発部のマネージャー

年相応の豪快さを持つ。

本社の社長とは昔ながらの友人であり、若い頃から女遊びに精通している。

また、会社用の別荘を大乱交の聖地として利用している。

目次

■ プロローグ	8
二十人の想い	13
女ひとりの社員旅行 前半	65
女ひとりの社員旅行 後半	102

■ プロローグ

十年振りの男女交際は唐突だった。

やはり、恋愛に於いて共通点が多いのは重要らしい。高校の同窓会で久しぶりに再会したかと思えば、その日の内に盛り上がり、彼と関係を結んでしまったのだ。

お酒を飲みながら、高校時代の回顧である。センチな想いを極めていたようだ。

お互いに「いい歳」なのも理由かもしれない。理想は理想でしかなく、現実的に存在する彼を手に取り、今日も互いに貪り合っていた。

「翠歌ッ、翠歌ッ、んちゅっ、んっ、ぢゅっ、翠歌ッ……!!」

「ひゃあああっ、そ、それ、最高……巡めぐくん……も、もっとお願ねがい……」

「翠歌は、ホント耳舐められるの好きだなく、んちゅっ、ぢゅっ、ぢゅくっ♥」

「ひあああああ……脳みそ掻き回されてるみたいで……幸せなの……!!」

「いくらでもやってあげるけど、手え止まってるよ。俺もう限界だからさ」

「ん、んん……ごめん、巡くんの……凄くドロドロに……ガマン汁が……」

「あああ、イクツ、そろそろ出すよっ……!!」

「うん……私も……」

「あああっ、あああああああッ!!」

「んっ、ひゃあああああッ!!」

耳元から脳へと直接伝わる、巡くんの断末魔。同時に、私の太腿へと熱い感触が這う。巡くんが絶頂に至ったらしく、宛がわれた亀頭から白濁が満ちていた。

私も、呼吸を合わせてオーガズムを得る。耳を蹂躪されながら、右手で巡くんを慰撫しつつ、左手で陰核を擦り上げていく。じわりと染みるような快感が昇華していった。

「はあ、はあ、はあ……」

「翠歌……気持ち良かった？」

「え、う、うん。良かったよ。耳舐められるの好きだから。巡くんは？」

「最高だよ。マジで一日中ヤツてたいわ。という訳で今度は俺が下な？」

「ええ、出したばっかなのに凄いなあ。でもこれから買い物に行くんだよね？」

「なんか買い物はいいや。もっと続きしてたいんだけど、ダメかな……？」

「ん……良いよ。じゃあ、巡くんの……お願い」

「よっし。いやあ、エッチだなあ。流石は俺のお嫁さんだあ」

「……あはは」

三十代も中盤に拘わらず、二人して男女経験が豊富という訳では無かった。私が十年振りな上に、巡くんに至っては私が初めてだったのだ。

休日なのを良いことに昼間から肉体を交える様子は、まさに思春期の男女である。それ以上かもしれない。これまで抑圧してきた性欲が一気に暴発した感じだ。

まるで不足した思い出を補うように……必死で異性の肉体を味わい続けていた。「仕事の調子はどう？」

「えっ!? ああー、まあ。順調だよ。大きなプロジェクトが終わったから、やっと一息吐けるって所かな。だから、これからは定時で帰れるよ」

「言い寄られたりしてない？」

「あはは、そんなことないってば……」

余韻に浸る中で巡くんが仕事の話を作る。私は「またか」と内心で溜息を吐いた。私は、大手企業の開発部に属している。技術課は私以外の全員が男性だった。

三十二人が所属する中で三十一人が男性という。女性は、私一人だけ……女性の技術者って珍しいなと、巡くんに突かれて思わず答えてしまったのだ。

いま考えれば、そんな内情まで話さなくても良かったと思う。

巡くんは、思いの外に嫉妬深かった。

「そんな男しか居ない職場でホントに言い寄られたりしてないの？」

「当たり前じゃん」

「若い奴らばかりなんだろう？」

「でも二十代の子は、私のことなんてオバサンくらいにしか思っていないから」

「ホントかよ」

「十年以上も勤めて、そんなの一回も無かった訳だし。私なんか拾ってくれるのは、この世で巡くんくらいなもんだよ？」

「へへ、そっか。じゃ、俺だけのお嫁さんだな」

「あはは」

ところで……最近は、よく巡くんの口から「お嫁さん」という単語が出てくる。

巡くんも私も、もうすぐ35歳だ。

巡くんは考えているのかもしれない。私との将来を……

「……………」

別に不満は無い。寧ろ、私も望む所だ。

きつと、巡くんを逃したら、もう私に婚期は訪れないと思う。

巡くんは良いヒトだし、なにより一途だ。私なんかには勿体ないくらい良いヒト。

ただ……時々、高圧的になる所が玉に瑕である。

始めの頃は優しく、寧ろ温和だった。

日を重ねるに連れて少しずつ口うるさくなつたというか……良いんだけども。

また、私自身ちよつと自己嫌悪に苛まれることがある。心のモヤモヤ……

間もなく私は三十五歳。もつと、いっぱい恋愛しておけば良かったなあ……

二十代の頃は本当に無気力で……なんで、なにもしてこなかったのかなあ……

と、たまうに思う日があつた。

でも別に良い。巡くんと、これから幸せを作っていけば良いのだ。

この時は、本心からそう思っていた。

二十人の想い

私が勤める大手とは、多業種を包括したグループ企業だ。

金に任せて優秀な人材を集めながら、一代にして現在の地位を築いた気鋭である。呆れるくらいに規模が広大だから、敷地に入ってから私の属する開発部まで移動に豪く時間が掛かる。ドーム球場くらい広い駐車場に車を停めてから、私の職場まで二十分は長々歩かされていた。

「柿崎さん。おはようございますっ」

「あつ、桃ちゃん久しぶり。おはよう」

「おはよ、柿崎」

「おはようございます」

そこで擦れ違ふ人々。十年も勤めていれば、嫌でも顔見知りが増える。

尤も、殆んどが名前も知らない仲だけど……挨拶を受けては流れるように挨拶を返していく。営業部を経由する時のお決まりだった。

「おう、おはよう。柿崎」

「おはようございます、水戸さん」

「おはようございますーすつ、翠歌ちゃん。今日も綺麗じゃんツ!!」

「マジでそれな」

「あはは、止めてよ。赤羽くんつ。墨田くんも!!」

「もうすぐ誕生日じゃん。楽しみにしててね。色々用意してるから」

「今日も頑張ろうねえ」

「うんっ、ありがとうとおツ!!」

営業部を抜けて開発部のエリアに入ると、擦れ違う顔触れに馴染みが出る。

加えて、女性の数が一気に減ってしまう。開発部の男女比は大きく偏っている。

だだっ広い空間に、ぽつぽつと女性の姿が見えるだけだ。

よって女性は目立つ。私が現れた瞬間に、見知った顔が次々に挨拶してくれた。

「おはようございます……」

そして、私の開発部・第二技術課へと到着すると、いよいよ女性の姿が無くなる。

広いオフィスに三十人、その全てが男性だった。

こんな私でも、勤続年数が十年と重なれば、立派な中堅どころである。私の姿が見えると、みんなして丁重に出迎えてくれた。

「おはよーッス、翠歌ちゃんッ!!」

「波瑠くん……ちゃん付けは止めてっば。仮にも先輩なんだから」

「へへっ、ごめんごめん。荷物、持つよ」

「ん、ありがとう」

真っ先に私を迎えてくれたのは、技術課最年少の大宮波瑠くんだった。

歳は、なんと十九歳。私より十五歳も年下の男子だ。

まだ高校生のような顔立ちに、無邪気な笑顔から八重歯が見えたりと、なにかと可愛い子である。可愛いって言ったたら、本人は怒るんだけど……でも、可愛い。

紳士風に私の鞆を持ってくれたりもする。

しかも、並んで歩く際に、私の肩へと腕を回していた。

「んじやあー、今日も頑張りましょうかあ〜」

「んあ……ね、ねえ、そんな密着されると恥ずかしいって。みんな居るんだから」

「えー？ これくらいで恥ずかしいとか、俺に気があったりするの？」

「な、無いからッ、これっぽっちも……!!」

「んじや、一々気にしないでよ。つか、はっきり言われると傷付くんだけど」

「ご、ごめん。でも波瑠くんだって私なんか気にしてないでしょ？」

「なにそれマジで言ってるの？ 俺は……」

「おい、そこまでだ。翠歌さん、おはよう。コーヒー飲む？」

「名月くん。おはよ。うん。欲しいな」

私を抱く波溜くんの力が籠められる。波溜くんがなにかを言いかけて……僅かに緊張感が走った所に、それを鋭い声が遮った。

第二技術課のオフィス。その入口から私のデスクまでの間を塞ぐ巨体……

エスプレッソマシンの前に、二メートル近い身長の方が聳えている。名前を瀬戸名月と言い、私とはもう十年近い間柄の同僚だった。

そこそこ長身な波溜くんよりも、二回りは大柄の名月くんが私たちを睨む。

「もう仕事が始まる。スキんシップは程々に、な？」

「は、はい」

「わ、分かっていますよ、はは……」

こんな巨体で筋肉質で、更に硬派な顔立ちの名月くんに凄まじければ、お調子者の波溜くんも流石に苦笑いしか出ない。私も、ビクンと背筋が伸びた。

と、ビビっていた波溜くんが名月くんへと挑発的に歩み出る。

「主任は相変わらず堅いっすね。尊敬はするけど、そんなんじゃないっすまで経っても攻略できないっすよ？ 良いんすか？ 僕なんか攻略しちやって……」

「よ、余計なお世話だ」

「先輩い、硬派も程々にしないと、一生進展しないっスよお？」

「知ったような口を利くな。童貞が」

「うぐっ……!!」

「?? 攻略って？」

「き、気にしなくて良い」

「相変わらず繰り広げてるね、お三方。翠歌ちゃん、おはよ♪」

「あ、うん。明良くん。おはよ。ちゃん付けはヤメてね……」

「……おはようございます」

「冬治くんも、おはよ」

「おはようございませす、翠歌ちゃんっ」

「翠歌先輩、おはようございます」

「翠歌さん、おはよッ」

「み、みんな、おはよ。だから、わざわざ集まってこなくて良いってば……」

私を置いて名月さんと波瑠くんが小競り合う……いつもの光景だった。

そうこうしている内に、みんなが集まってくる。これも、いつもの流れだ。

暖かい室内で厚着は蒸す。ということとで早速とみんなが私のコートやマフラーを預かってくれる。コーヒーを渡してくれる。私を取り囲んで至れり尽くせりだ。

みんなして出迎えてくれるのは嬉しいんだけど、こんな大勢に囲まれると物凄く照れてしまう。顔も、不可抗力でカーッと熱くなってしまう……

「今日の赤面、頂きましたッ!!」

「……ッ!! わ、わざと集まってるでしょッ!!」

「いやいや、上司が来たんだから、挨拶するのは当然でしょ?」

「もう私に挨拶しなくて良いからあ……」

「あー!! 可愛いー!! マジで翠歌さん可愛いーなッ!!」

「三十四歳でこのウブっぷり……逆に萌えるよな」

「部下に囲まれて真っ赤になってモジモジするの最高だあ……!!」

体質なのかな……私は、男性の視線に滅法弱かった。

異性の視線には、なにか蠱惑的な魔力が孕んでいるに違いない。

彼氏の巡くんと視線を交わすだけでも、すぐに顔が熱くなってしまふのだ。

視線が皮膚から吸収されて、脳をチリチリと焼いてくる。羞恥という官能が顔を出してくる。そんな視線が何十と束になれば、もう終わりだった。

真っ赤になって汗が出てきて……顔を背けたいけど、四方八方に囲まれてるから逃げ場もなくて……顔が熱い。身体が熱い。……アソコが熱い。

わざと私を視線で炙ってくる羞恥も恒例だった。

……

……

……

とまあ、朝から上司の私を弄ぶ男子たちだけど、仕事場では至って真面目である。ちやんとメリハリがあり、始業すれば目を見張る集中力を見せてくれた。

お陰で第二技術課は高い評価を得ており、先の巨大案件の完遂もあって本部から社員旅行の奨励を賜っている。来週の今頃は、揃って社の別荘に行く予定だった。

(巡くん、納得してくれれば良いけど……)

「はあ……」

「翠歌さん、なにボーっとしてんだ？」

「あ、ううん。あはは、ごめん。えっと、なんだっけ？」

「なについて、せつかくの飲み会なんだから、もっと楽しくしようよ」

「う、うんっ。そうだね、ごめん」

名月さんと明良さんの言葉で我に返る。気付けば、またみんなが私を視ていた。

室内は薄暗いものの、天井にぶら下がるミラーボールが派手な明かりを演出する。テーブルの上には、おつまみやらビールのジョッキが二十人分……案件が終わって、今日が金曜日ということもあり、みんなで打ち上げに来ている最中だった。

第二技術課の部長が打ち上げ好き……ということで大きなプロジェクトが終わる都度に、こうして仕事終わりに駆り出されている。人数が多いから、居酒屋よりもカラオケ等の大部屋を貸し切るのが常だった。

参加は自由。お酒が弱い上に、女は私だけなのが少し恥ずかしいから、あんまり乗り気になれないんだけど、「華が欲しい」って言われて、毎回無理やり引っ張り出されてしまうのだ。

私一人が居た所で大して変わんないと思うけど……

でも、私が来なければ、せいぜい五人くらいしか集まらないとのこと。

私が居るから、今日も二十人が来てくれたのだと部長が言う。

だとしたら、女冥利に尽きる話だった。

周囲の喧騒を耳にしながら、ちびちびとお酒を嗜む私。ボーっとしすぎたらしく、周りの注目が集まってしまう。歌い終わったらしい波瑠くんがテーブル越しに身を乗り出してきた。

「なにか考え事？」

「あ、うん……」

「どうしたんっすか？」

「あの、ね……その……い、いや、やっぱりいい」

「えー、なんだよ!？」

言葉を濁す私に、波溜くんだだけじゃなくて周りの男子たちも野次を飛ばしてくる。こんな、和気あいあいとする中で水を差すのは……やはり、良くなかったのだ。

「私……来週の社員旅行は行けないかも……」

「えッ!? な、なんでッ!？」

刹那。私の言葉に、室内が水を打ったように一瞬で静かになった。

それぞれに分かれて飲んでいた筈なのに、各テーブルの喧騒がピタッと止まって私に視線を向けてくる。「えっ……!？」と思いながらも、私は言葉を続けた。

……続けてしまった。

この言葉が切っ掛けである。この瞬間が、第二の人生の幕開けだった。

「いや、彼氏的にね……ちよつと問題がありました」

「……えッ……!？ 彼氏……いるの……?」

男性陣が一斉に目を見開いて固まる。息を飲んで、それぞれ顔を見合わせていた。あれ、意外だったのかな……? 前に言ったこと無かったかなあ……?

巡くんへの不満もあつたのかもしれない。室内に不穏の空気が拡がっているにも拘わらず、お酒に酔っていたことも相まって、私は全く気付ずに言葉を続けていた。

「彼氏がね、言うんだよ。行くなつて。女一人なのに有り得ない、つてさあ……」

「……そうなんです」

明良くんだけが相槌を打つ。こんなに辺りがシーンとしてるのに気付かないとは、私の鈍感っぷりは流石だった。

「喧嘩しちゃった。ただの社員旅行だよって言っても聞く耳を持ってくれなくて」

「……なんで反対なんでしようね？」

「ヘンに嫉妬深いんだよ。ウチのチームは若いヒトばかりなんだから。私なんていつも弄られてばかりで、異性として相手にもされてないのにねえ、あはは」

「……」

「つて、ごめんね。なんか盛り下げちゃって」

「いえ……大丈夫ですよ。飲み直しましよっか」

「うんっ」

空になったグラスに、明良くんが氷とアルコールを注いでくれる。私がクイツと軽く飲み干して見せると、僅かに部屋の空気が弛緩した気がした。

止まった時間が再び動き始めており、周りが新たに曲を入れている。既にボーッと揺らめく頭の中で私は小さく安堵した。

……それが暫くが経過する。

男性陣が代わる代わる私の所に来ては、彼氏について根掘り葉掘り訊いてきた。

それもひと段落すると、右手にピタリと寄り添っていた明良くんが次第に私との距離を縮めてくる。酔っているらしく、私の右腕を取って周りの喧騒に忍ぶように、耳元で話しかけてきた。

「翠歌ちゃん歌わないんですか？ まだ翠歌ちゃんだけ歌ってないですよね？」
明良くんの吐息が耳を掠る。ビクツと身体が震えた。

「私は……遠慮しておく……」

「えー、まさかまた歌ってるトコ視られたくないとか言うんじゃないでしょうね」

「だって私が歌う時だけ、みんなわざと静かになるじゃんツ。恥ずかしいの」

「酔ってるんだから気にならないでしょ。今度はジロジロ視たりしないからさ」

「前にも同じこと言ってた気がするけど。ってか、その、距離近くない？」

「嫌ですか？」

「そ、その、仕事帰りで汗臭いから……」

「全然気にしませんよ。ってか翠歌ちゃんの匂い、良いですよ」

「……………」

「……………ッ」

私の右部へと撓垂れる明良くん。もう完全に横からハグしてる状態だった。

明良くんの顔が目と鼻の先に迫る。SNSで人気を博す程の、端麗な顔が……

そこに、擦ったい吐息。いまにもキスしそうな……ちよつと……これは流石に!! 私の胸が激しく高鳴っているのを感じる。私の腕を抱く明良くんからも……明良くんが見つめてくる。思わず俯く私。明良くんが髪を掻き上げてきた。

私のうなじ……一点に見つめて……ま、まさか……

と、思った次の瞬間。そこに鼻が近付いてきて……静かに臭い始めていた。

出不精な私は、いま着てるワイシャツも、かれこれ三日は替えていない。確実に臭う筈である。抵抗したかったけど、頭が回り過ぎていて動けなかった。

「ちよ、や、やめっ、マジで臭いから……」

「全然臭くないです、はああく、翠歌ちゃん……♥」

「あ、明良くん……わ、私っ、彼氏いるって言ったじゃんツ……ダ、ダメだよ」

「臭いを確かめるのもダメなんですか?」

「……た、たぶん……ん、あッ……!!」

首に柔らかい体温が走る。明良くんの唇が当たっていた。

というより、断続的に重なってくる。何度も何度も、細かく押し付けられていた。

「ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ……ちゅっ、んっ……翠歌ちゃん……♥」

「ああああ、だめっ……キスはアウト……か、彼氏が居るって言ったでしょ……」

「ごめんなさい、ちよつと……止められなくて。酒の勢いってことで。ちゅっ♥」

「明良くん、あ、あんまり酔ってない癖に……なんで私なんか……明良くんは……有名人で……かなりモテるんでしょ!? んっ、はあ、はあっ……他の部署でも噂になるくらい……他の部署の子から告白されるくらいッ……」

「正直ファンなんか興味無いです。アイツ等は、所詮有名人が好きただけだから」
「あッ、み、耳ッ、噛まないでッ……!!」

な、なんで急にこんなことになってるの……!?

しかも、彼氏が居るって言ったばかりなのに……!!

脈絡が無さ過ぎる。頭が回らず、どうして良いか分からない。

なのに、身体だけは正直にドキドキして……

喋る時だけ、律義に口を私の耳元へと寄せてくる。明良くんの息が耳の中に入り、それだけで全身の毛穴が開く。そこから汗が溢れてしまい、既に背中はずったりだ。

更に、耳朶を甘噛みされて声が出る。耳は私の弱点で……感度が段違いなのだ。

官能がグツグツと煮える。本能は、既にその態勢に入っていた。

明良くんは言う。

「キスして良いですか?」

誰にも聞こえないように、そんなことを耳元で呟いてくる。

「えええッ、急に……か、彼氏が居るんだから……」

「僕のこと嫌いですか？」

「そ、そういうんじゃない……」

「いまからキスします。本当に嫌だったら抵抗して下さいね………んっ………」

「………ッ!!」

………私には、突き飛ばす勇気が無かった。

顎を右手で軽く捕らわれると、そのまま自らの顔へと向けてくる。

そして、わざとゆっくり遅く唇を近付けてきて……私の唇と重なった。

お酒に弱い癖に、私は今日に限って浴びるように飲んでいる。既に、眠りに就く直前の微睡み状態である。上司の身として体裁を保つ為に、なんとか平静を装っているに過ぎないだけだ。

本当は気分が高揚していて、ふわふわと脳が空中に浮いている感じだけ……

そんな中での、明良くんとキス……なにがどうなっているのか分からないけど、脳が悦んでいたことだけは理解した。

「んっ、ちゅっ………」

「ふえ……あ、あきよし、くん………」

「ちゅ……ふふ、翠歌ちゃんとキスしてる……夢みたいだよ………♥」

「そんなこと、ないでしょ……明良くん、モテる……みんなに言ってるんでしょ」

「マジで自分でも分からないですね。自分いままでモデルとか女優とか色んな子と付き合ってきたけど、なんででしょうね。翠歌ちゃん、イイツス……翠歌ちゃんが、良いんです。初めて会った時にバチツとハマったような気がしたんです。んちゅつ、ちゅつ……だから、好きです♥」

「あわわわあ……初めて会ったの、四年前……し、信じられないよ……」

「信じさせます、いまから……これから……ちゅつ、んっ、翠歌……♥」

「あつ、あああつ……♥」

「お、おい、見ろよ。マジで……？」

「な、なにやってんだ、松川ツ!? 翠歌さんもツ」

ただ唇が重なるだけのキスが延々と。うなじの時もそうだったけど、明良くんはこつちの方が好きなのかもしれない。柔らかい感触が何度も、何度も、何度も……でも、気持ちは分かる。唇を重ねるだけでも伝わってくる。互いの唇が重なる度に、ブリツと脳が痺れていた。

いやいや、ダメだって……彼氏が居る……けど抗えない。サンドバック状態だ。

お酒の所為で善悪の判断が付かない。酒に酔ってるから……お酒の所為で……

と、これだけ激しい動きをしていけば、周りに気付かれていく。一人が気付いて、すぐに全員へと広まる。争うように、みんなが集まってきた。

「松川、お前……」

「あ、すんません。瀬戸さん。その、お先にキス頂いちゃってます」

「いや、見れば分かるよツ、なんで急に!？」

「翠歌ちゃんのことを好きだから……」

「ええええ、だったら俺もっスよ!! 抜け駆けしないって言ったじゃないスか!!」

「あー、悪い」

「来週の旅行に告白する予定だったのに!! 明良くんも、そうだった筈でしょ!？」

「彼氏が居るって言われて……なんかガマン出来なくなった」

「あぁー……」

「……」

なにやら言い争ってる声が聞こえるけど、殆んど耳に入ってこない。

こんなにも頭がボーっとしてるのに、身体はジンジンしてて……初めての気分だ。

ああ、それにしても、これってイケないことだよ……

どうなるんだろう。まず、これだけじゃ終わらなさそう……

身体も、そう感じているみたい。まるで「次」を欲して胎動しているようだった。

……臍気な視界の中で波瑠くんが近付いてくるのが見える。いつも紳士を装うと、背伸びした弟みたいな可愛い子……いまは、複雑な顔色を浮かべていた。

「翠歌ちゃん……」

「は、波溜くん……」

「その、明良さんとキスしてたけど……す、好きなんスか？」

「えっ、そ、その……ヒ、ヒトとして、ねっ……!!」

「……僕のこととは？」

「波溜くんのことも、好きだよ。ヒ、ヒトとして……」

「じゃあ………ぼ、僕も……して良い？」

ああ、珍しい。お調子者で犬みたいに元気な波溜くんが、お酒の所為なのか否か、真っ赤な顔で言葉を濁している。私にキスを懇願している。非現実的だった。

だって19歳の童顔だけど、波溜くんも絶対にモテるタイプなのに……私なんかにキスをせがむなんて有り得ないじゃん。どうすれば良いの……？

言葉に悩んでいると、波溜くんがテーブルを退かして私に迫ってくる。

これまた、顔が近かった。

「明良さんには出来るけど、僕とはしたくない？」

「そんな言い方、ズルいよ……」

「じゃあ、するね……」

「………」

波溜くんの目が潤んでいる。

その煌めきに魅入られていると、波溜くんの唇が重なってきた。周りから、ちよつとした歓声が上がった。

「あッ……」

「翠歌ちゃん……♡ 僕の、ファーストキス……♡ んっ……♡」

「あっ、波溜くん……んっ、わ、私なんかが初めてで良かったの……?」

「あのね、翠歌ちゃん。自分がどれだけ魅力的な存在か、もつとちゃんと認識した方が良いと思うよ。なに、さっきの『異性として相手にもされてない』って奴……異性としか見てない奴しか居ないっつの!!」

「そんなこと……ない……そんなこと……んっ……ああっ……」

「翠歌ちゃん……好き♡ んっ、ちゅっ……れるっ、んぢゅっ……」

「ひあああ……あむっ、好き、って……そんな……あああ……」

抵抗する力はない。抵抗する気も……無かった。

座る私の太腿へと馬乗りする波溜くん。がっちり背中へと腕を回して抱き締めて、逃げられないように全体重を掛けてきた。

波溜くんの体重……体温……心臓の鼓動まで伝わってくる。かなり興奮しており、鼻息の荒さも隠せず、しかも私の下腹部には波溜くんのソレが押し付けられていた。

こんなに密着してるのだから当然だ。

ズボン越しに、凄まじく隆起したソレが擦られる。衣服の上からでも、大きさが一目瞭然なレベルである。体重ごと押し付けられてグリグリされて……私の胎内の「女」を無理やり萌えさせていた。

「んちゅっ、れろっ、くちゅっ、んっ、翠歌っ、好き……れろっ……♡」
「あっ、あっ、あああっ、あっ……♡」

それにしても激しいキスだ。

ファーストキスって言ったのに、唾液を絡めながら私を激しく貪っていた。

明良くと波溜くんのキス比べとは、なんと贅沢の極みなんだろう。微睡眠では脳が理解に達せず夢心地が広がるのみである。ただ、身体はしっかり反応しており、下半身がじりじりと熱かった。

初めての癖に私の口内へと一杯のツバを流し込んでくる。どんだけ飲み込んでも次々に送られて止まない。更に舌まで伸びてきて……ファーストキスでディープな激し過ぎる味わいを見せていた。

とろんと瞳が蕩ける私。これ以上の多幸福感は無いだろう……と、考えていた矢先、更なる怒濤が押し寄せる。まだ、これは始まりに過ぎないのだ。

「翠歌さん……」

「ふえ……名月……くん……」

「翠歌さん、顔めっちゃスゴいことになってますよ。汗だくで真っ赤で蕩けて……なんていうかエロいです。半端なく……」

「だ、だってえ……」

「次は、俺の番です」

「名月くん……♡」

「好きです。翠歌さん。配属された時から。誰よりも、一番……」

その言葉が私に沁みてくる。ビクツと臀部が揺れる。身体が悦んでいた。

とうに、私に正常な思考回路は残っていない。身体が次を求めて止まず、それに私も従うのみである。続いては名月くんが私へと跨ってきた。

名月くんは古株で私と十年の付き合いがある。社会人バスケットチームに所属してて、そのキャプテンを担われてるだけあって、とにかくデカイ。私と並んだら、正に雲泥の差っていうくらい……

そんな名月くんが、ソファアに凭れ掛かる私へと対面座位してくる。というより、覆い被さってくる。細身の波溜くんとは迫力がまるで違う。けど、安心感があって、優しさが伝わってきて……それに、またしても下腹部から愛を感じていた。

……大きかった。

「んっ、ふううっ、んっ、好き、好き……翠歌さんっ……♡」

「名月くんっ、あああ、名月くんまで……んちゅっ、ん……あああ……」

明良くん、波溜くん、名月くん、それぞれ三者三様のキスだった。

名月くんを全身で味わいながらのキス。意外にも名月くんは積極的に唾液を流し込んでくる。上から落とすように……次々とツバを流し込んできた。

私は、全て受け止めた。ただのツバなのに、飲み込むたびに身体が発熱した。

脳汁が迸り、オーガズムに塗れて、アへっていた。

それと、腹部に押し付けられた股間の大きさには驚いた。

最初、大根かと思った。でも、動くし熱いし……間違いなくAVでも見たことが

無いレベルの大きさである。こんなの、相手に出来る女性なんて居るのかな……？

なんて感じながら……

このあと、散々相手にするんだけど……

「名月さん、いい加減に長いです。次は俺も良いっスか？」

「俺も。翠歌先輩とキスしたいです。俺だって、ずっと好きだったんですから!!」

「僕も!!」

「はあ……ライバルが多すぎるな……分かったよ」

「計画が早まっちゃったなあ、告白大会は旅行にするつもりだったのに……」

「ふえええ、そ、そう、なの……?」

「そうだよ? みんな翠歌さんのこと大好きなんだから。なのに翠歌さんってば、勝手に彼氏作っちゃって……翠歌さんは技術課のアイドルなのにさあ。アイドルは彼氏作っちゃいけないって知らないの?」

「わ、私……アイドルじゃ、ない……」

「ま、彼氏くらい俺らで奪い取れば良い話なんだけどな」

「そうそう、結婚してる訳じゃないんだし」

「結婚してようが想いは関係ないだろ。本気で好きなら奪い取るまでだ」

「という訳で、まずは俺らの想い、受け取ってね」

「次は俺ね。翠歌さん……♥」

「その次は俺ッ!!」

「いやいや俺だろ!!」

「焦んなよ。時間なら、あるんだから……」

「ふああああ……ま、待っ……♥」

……

……

……

名月くんの後も、男子たちによるキスは延々と続いた。

「ご丁寧私へと想いを伝えてからの、激しいキスを延々と……二十連発も……同僚が代わる代わる私のこと好きって言ってくれての、激しいキスを……二十人キスだけでイけるなんて知らなかった……キスだけでアへるとは思わなかった……後半になるに連れて激しさが増していき、仕舞いには唇だけに及ばず、犬のように顔をベロベロと舐めてきて……とにかく気持ち良かった。」

酩酊した微睡み状態での快感が、これ程に気持ち良いとは思わなかった。愛をカタチにされるのが、こんなに興奮するとは思わなかった。間違はなく人生で一番幸せな瞬間だった。

しかし、まだ此処はピークじゃない。まだまだ今夜は終わらないようだ。キスが一巡しようとも、男子たちは興奮冷めやらぬ感じである。

寧ろ、より拍車が掛かっており、それは外見からも明らかだった。

「ふあ……」

「翠歌ちゃん。俺らの気持ち、ちゃんと理解してくれました？」

「翠歌さんと一回キスしただけで俺ら、もうこんなッスよ」

「ああ、ヤベえよ……俺らの唾液でドロドロの翠歌ちゃん視てるだけで……俺ッ」

「俺も……イキてえ……翠歌先輩……♡」

カラオケルームの片隅のソファーに、だらしなく一人で凭れ掛かる私……
それを、二十人の男子たちが取り囲んでいる。下半身を見ると、どれも明らかな膨らみを見せており、全く隠そうとせず私へと見せつけていた。

「あ……あ……みんな、スゴいことになってる……」

触られてもないのに私の身体が呻く。まるで欲しているようで恥ずかしい。けど、止められない。周りはその気だし、私ももう止まらなかつた。

じりじりと男子たちが迫ってくる。私を囲む円がゆっくりと小さくなってくる。ポツンと佇む私の股座に波溜くんが屈みこむ。そつと私の太腿へと手を添えられてビクンと身体が弾けた。

「めっちゃ感度良いっすね。触っても無いのに、こんなビクビクしちゃって……」

「元から良いんですよ。だって、毎朝ただ視られてるだけで赤面してたもの」

明良くん、名月くんと、次々に私へと集まってくる。男の匂いが私を包み込む。よつぽど縊るような眼をしていたのだろう。あの名月くんが初手を打ってきた。

「脱がしますね」

「ええっ……?」

「脱がされたいでしょ?」

「……………」

「どのみち、ワイシャツが張り付くくらい汗だくなんですから、身体を拭かないと風邪引いちやいますよ」

「ううツ……」

ワイシャツのボタンが一つ一つ解かれていく。ズボンのベルトまで……

やがて上下共に剥かれてしまい、露わとなったノンブランドのベージュ色な下着。地味な上に解れも目立っていて恥ずかしい。が、隠せる程の余力もなく、周りから歓声の声が沸いた。

「翠歌先輩って汗っかきだよね」

「ああ、スゴいな。こんな肌が汗で煌めいてるなんて……スポーツ後みたいだ」

「翠歌ちゃんの汗……ああ、視てるだけでヤベェよお……」

「やっぱり巨乳だね。知ってたけど、遂にナマで視られるんだ……」

「下……視ろよ」

「ああ、めっちゃ濡れてんな。キスで……あんなに濡れたんだ」

男子たちに下着への関心は無い。半裸姿も一瞬のこと、すぐに男子たちによって下着にも手を掛けられていく。流石に抵抗する私……だけど、それで動きの止まる流れじゃなくて……遂に、私は赤裸々を晒す羽目になった。

二十人の同僚たちの眼前で……

「おおおっ」

今度は歓声ではなく感嘆が漏れる。垂れ下がった乳房に、やたら大きい乳輪など、コンプレックスの多い私の身体を、誰一人否定せずに目を奪われてくれた。

それどころか、突っ張っていた股間へと露骨に手を伸ばしている者も居る。私の肉体を肴に、ズボンの上から按摩している。いつもの同僚が、私の身体で興奮していた。

こんな私に魅力を感じてくれている……それだけで嬉しかった。

股座に位置する波瑠くんが私の両膝を掴む。閉じていた私の両膝……ゆっくりと開かれていくと、二十人のキスで蕩けた蜜壺が現れた。

衣服越しに男性器を宛がわれ続けた所為で、麻痺したように引き攣った女性器。ヒクヒクと呻き、涎を垂らすように愛液が零れている。応じるように、波瑠くんが顔を近付けてきた。

「あ……」

なにが起こるのかは一目瞭然である。待って。いま舐められたらヤバイ……!!
そう言いたかったけど声が出ず、直後に快樂の波が私を襲った。

「あッ♥ ああああああッ、あああああッ!!」

「ぢゅくっ、ぢゅるるるっ、ぢゅるっ、んっ、ぺろっ、れろれろろッ♥」

グイツと私の背筋が弓なりに反れた。

ギリギリ塞き止めていた尊厳が一気に折れ曲がった感じだ。

目が見開かれる。口が限界まで開いてしまう。腰が浮いて局部を突き出している。女として、恥ずかし過ぎる体勢である。私の感度は最高潮に達しており、ちよつと刺激を加えるだけで可笑しくなる程だった。

「れろれろっ、んちゅっ、んっ、んぢゆるるるっ、んっ、んはあ……♡」

「あああッ、ふあああッ、あああッ、ンアアアアアアアアアッ!!」

バタバタ、バタバタッ。感応が止まず、バタバタと全身が暴れていた。

噂に依れば童貞な筈なのに、波瑠くんのクンニは、その……凄まじかった。

クリトリスに唾を垂らしては、クチュクチュと舌で掻き混ぜているような……？

初めての感覚である。唾液に浸る陰核へと何度もキスされていく。時折り、強く吸い上げられる心地には、背筋のゾワゾワが止められなかった。

「感じてる翠歌ちゃん、めっちゃ可愛いですよ」

「翠歌さんの、善がる姿もっと思わせてほしいです」

「ああああッ、あ、明良、くん……名月、くん……ッ、待って……これ以上は」

「これ以上は、って。これからなんですよ。僕が右を頂きますね」

「じゃあ、俺は左を……」

「ま、待ッ……あああああああああッ、アアアアアアアッ!!」
波瑠くんの攻撃だけでも脳汁が止まらないのに、そこに明良くと、名月くんの耳責めが加わる。これが桁違いの快感だった。

私は耳を責められるのが本当に好きで……巡くんとの行為でも、これだけは特に積極的にお願いしている。右耳を犯される中で、左耳を自らの手で塞いだりすれば、より感度が増していく。耳の穴に舌をグリグリと突っ込まれると、まるで脳みそが蹂躪されるような心地に浸れるのだ。

そんな恐ろしい狂喜が両耳から押し寄せる。いつもの二倍なんてものじゃない。脳が改造されていく想いに、一瞬で意識が吹っ飛んでいった。

「ぐちゅっ、ぬちゅっ、んっ、あむっ、んっ、翠歌ちゃん、ホント耳に弱いね」

「ぢゅるっ、ぢゅぷぷっ、ぬぷっ……くちゅっ、翠歌さん……ッ♥」

「あああああああああッ、ひやあああッ、んんんっッ!!」
意識が飛んでも、すぐに新たな快感が私を呼び起こす。

だけど、またキャパシテイが限界に達して意識が落ちるといふ、その繰り返しを延々と受け続ける内に膀胱が弛緩する。Uスポットを刺激する波瑠くんだけが私の尿失禁に気付くのだった。

「あ、あああ……あ……あああああ……♥」

なにこれ……こんな快感が、この世にあつたなんて……

両耳を同時に舐められて……それに、波瑠くんの舐陰も凄く気持ち良い……
いま、絶対に顔がめちやくちやに蕩けてる……

全身の筋肉が弛緩しており、このまま私の肉体が液状化しそうな感覚だ。

ぼやけた視界の中に十何人の男子が窺える。私を一直線に見つめては、息を荒くしている。私の、性に犯された表情なんて視ないでよ……恥ずかしいよ……なのに、全身をチクチクと刺す視線までもが堪らなかつた。

今度こそ、これ以上の快楽は無い……

そう感じる度に、また新たな刺客が現れる。私の痴態をオカズに、ズボン越しに自らの慰めていた男子たちも、痺れを切らして群がってきたのだ。

「こんな大きいおっぱいが、ずっと手付かずなんて勿体ないですよ♥」

「翠歌先輩……俺も、おっぱい頂きます♥」

「ああああああッ、ひやあああん、お、おっぱいまで……ッ、こ、こんな同時に刺激されたらッ、ぜ、絶対ヘンになつちやうッ、ダ、ダメッ、これ以上は……ああ、あああつ、んくうううつ、ちよ、あああああッ!!」

「じゃあ、僕は翠歌さんの指かな。右手、失礼します。んっ、ちゅぱっ♥」
「自分は左手を……んぢゅっ、んっ、ふうっ……」

「ええー、なら残るは足かな。翠歌さんの足ッ、はあ、はあ、はあッ……足に擦り付けたいけど、まずは翠歌さんに満足して貰うのが先ですよ。舐めます。んちゅ、んっ、くちゅっ、ぐちゅっ……♡」

「俺も頂きます♡ はむっ、んっ、ぢゅっ、ぬちゅっ♡」

「僕も♡ くちゅくちゅっ、んちゅ、ぬちゅっ、んはあ、あっ……♡」

「お腹……ちよっと、明良さん退いて。無防備なお腹……頂きます!!」

「翠歌ちゃん……♡ 俺もいっぱい舐めるから、ちゃんと感じてね……？」

「翠歌さんモテ過ぎっスよ……取り合いになるのは分かったのに……ああもう」「ひゃああああああああああああああああああッ!!」

男子たちは、パンパンに膨れ上がった左右の乳首にも侵攻した。

とうに許容量を大きく上回った快感であり、いまの私では殆んど理解に及べない。投げ出された両手にも、それぞれ数人の男子たちが忍び寄り、私の指先をいっぱい舐めてくれているらしいけど、そこにまで気付ける余力は無かった。

入社して一年目の新人くんが右手の親指にしゃぶり付いてくれているようだ。

また、第二技術課では珍しい私よりも年上な先輩は、薬指と小指を丹念に甘噛みしている。左手にも、少なくとも二人以上が愛撫してくれていた。

足も同様である。太腿から足の指先にまで隈なく男子の舌が這っている。

私に気付いて貰えるように、甘噛みとかもしてくれていたらしいけど、そんなの全く気付かなかった。快感のレベルが強すぎて……

私という存在が男子の舌で舐めまわされている。男子の肉体に包まれている……その事実だけで私は充分すぎた。

「ああああッ、ああああッ、ああああッ、ああああッ!!」

「翠歌さんッ、翠歌さんッ、ああああッ、俺もうイクッ……はあ、はあ、はあッ」

「翠歌ちゃんのイキ狂ってる顔……最高だッ、うああああッ!!」

「翠歌さんッ……目は合ってるけど、俺らのオナニー気付いて無さそうだな」

「ああ……気持ち良すぎて目が虚ろになってるな……そこがまた可愛いんだけど」
なお、それでも手を余らせている男子も居た。

だらしなく鼻水を垂らしながら、壊れた機械のように延々と呻くだけの私……

そんな、女を剥がされた痴態を目に焼き付けながら、いつの間にやら取り出したペニスを扱っている。ぼんやりながら、その光景は窺っていた。

あんな、若くてイケメンな男子たちが……こんな、哀れで情けない年上の女に。ギンギンに反り上げた陰茎を、これでもかと強く乱暴に扱っているなんて……

更に、自慰に耽る男子たちは、テーブルに置かれていた私の衣服へと手を出す。

汗で湿り切った、私のワイシャツを……二十歳の子たちが片手で物色し始める。

私の汗で濡れたワイシャツ……恥ずかしい……それをどうするつもりなの？
歪む視界の中で憂う私を余所に、男子たちがワイシャツに顔を埋めた。

(あああああ……私の……汗臭いから、止めてよおお……恥ずかしいよ……)

「すうーはあー、すうー、はあーーッ、翠歌ちゃんの臭いッ、はああッ……」

「翠歌さんの汗っ、臭いっ、はあ、はあ、はあッ、あああ、翠歌さんッ……」

「翠歌先輩の靴下も最高だ。翠歌先輩、三日くらい靴下替えないって言ってたッ!!

これ、たぶん三日目の靴下だッ!! めちやくちや臭い……鼻が曲がるくらい臭い!!

やべえ、すっげえ興奮するッ、翠歌先輩ッ、あああああッ!!」

(ああああああああ、私の靴下までええええッ!? 靴下の臭いを嗅ぐのは

絶対ダメえええッ、それに三日目じゃないし。新しい奴なのにいい!!)

「んひやあああああああああッ!!」

「おっ、また翠歌ちゃんイッたみたいだ」

「凄いやな、何回目だろ。そろそろ俺も……ッ!!」

「俺もイクッ、最後は、このワイシャツに出してやるッ……!!」

「じゃあ俺は靴下にッ……はあ、はあ、はあッ、精液でベトベトにしてやるッ!!」

「くっ、あああッ、翠歌ッ、翠歌ッ、翠歌、翠歌翠歌翠歌翠歌ッ、好き好き好き」

「翠歌翠歌翠歌翠歌翠歌翠歌翠歌ッ、あああああああああッ!!」

(私の服に出さないでよおおおつ、服が精液塗れになったら、私どうやって帰れば良いのおお、だめえええ、あああああああッ!!)

私の心の叫びも虚しく、男子たちがワイシャツや靴下、ショーツなど、あらゆる衣服へと射精していく。テーブルに置いて、そこへと三人の男子が打ち付けていく。白いワイシャツに白濁液が染まる。黒いズボンにも……遠目からでも分かるくらい精液に塗れてしまう。靴下を嗜んでいた男子に至っては、あろうことか仕舞いには陰茎を靴下に入れた状態で扱っていた。

靴下の中に、あの子の精液が……私の服が……みんなの精液で……
屈辱で背德的である。なのに、なんでこんなに高揚するの……？

オーガズム、オーガズム、オーガズム。幸せ、幸せ幸せ幸せ幸せ幸せ。
涎、鼻水、涙、あらゆる液体が止め処なく溢れている。止まらなかつた。

満杯になった脳汁が、穴という穴から溢れているようだった。

……あまりにもイキ過ぎて私が屍になった頃に、漸くと男子たちの手も止まる。行為が終わる訳ではない。最終段階に突入するのだ。

「僕、良いっすか？」

「おー、遂に童貞卒業か」

「良いなー、初体験の相手が翠歌ちゃん。羨ましい」

「と、言っても翠歌ちゃん……大丈夫……？」
「……………」

波瑠くんが立ち上がり、ズボンを下ろしていく。下着も脱ぐと、そこには怒りに狂ったような、はち切れんばかりのペニスがあった。

周りは同性の仲間だらけというのに、堂々と天を仰いではヒクヒクと動いている。なによりも待ち切れない様子であり、波瑠くんは私の言葉も待てずに、亀頭を膣に宛がっていた。

こんなんじゃ、断われないよ……

最後に目が合うと、私は無言で頷いた。

「あッ、あああッ、翠歌ちゃん……い、行きますッ……」

「ふあああ……波瑠くんの……は、入ってくるッ……うううッ」

「い、痛くないっスか？」

「だ、大丈夫……全然大丈夫……」

身体は完膚なきまでに受け入れる状態だ。

真っ赤に腫れ上がった亀頭が陰唇へと押し付けられると、それに対応するように、ぬるりと肉壺が蠢動する。亀頭を軽々と啜え込み、そのまま根元まで吸い込んだ。

抵抗感は皆無である。寧ろ、胎内では褻が悦びに弾けていた。

「ひゃんんんんツ、き、気持ちい……んっ、波瑠くんの……ッ!!」

「うあああツ、な、なんて熱いんだ……それにグネグネしてる……俺のチ○コ……全方位から集中攻撃されてるみたい……こ、こんなスゴいなんてツ。ヤ、ヤバイよ。す、すぐイツちやうかも……!!」

「あツ、ひゃツ、あああんツ、は、波瑠くんツ……硬いツ……あツ、あああツ、それに、お、大きくてツ……んはああツ、はあ、はあ、はあ、はあツ!!」

「ああああツ、翠歌ちゃんツ、翠歌ちゃんと繋がってるツ……ずっと、憧れだった翠歌ちゃんと……はあ、はあ、嬉し過ぎて泣きそ……」

「んっ、ひゃっ、ふあ、あツ、波瑠くん……そ、そんなに私のこと……ツ」

「男社会で暮らして、しかも子供の頃から、ずっと引き籠もりだったから、俺……全然社交性とか無くてツ、でも、そんな俺を翠歌ちゃんは笑顔で……惚れないワケ無いでしょツ……!!」

「んはああツ、あツ、は、波瑠……くん……♥」

「これっぽっちも気が無いつて言われた時、めちやくちや辛かったつスよ……」

「ご、ごめ……そんなこと、ないからツ……あれは、つい……!!」

「マジで傷付いたから、この場でお詫びして貰いますよツ、んっ、はあああツ!!」

「んひゃあああああツ、ごめんなさいツ、んあああああツ、あああああツ!!」

波溜くんは無我夢中だった。

いろはの無い、ただ乱暴に肉壺を食い潰していくだけの腰使いである。

だけど、それが良い。小細工なんて要らない。童貞でも構わず、波溜くんがただ全力で私を味わってくれれば、それで良いのだ。

その想いは、しっかりと私の身体にも伝わってくる。テクニツクの無い一直線な抽送に歓喜を示しており、ズンズンと脳に響くオーガズムが怒涛の如く押し寄せる。私の意識が再び微睡みへと陥っていた。

「翠歌さん、またアへってるよ。あんなに感度が良いなんてな。楽しみだ」

「ああ、早く俺の番にならねえかな……もう爆発しそうだよ……」

「俺もう待ち切れないッ、善がってる翠歌先輩を視てたら……オナニーしたくて」

「また翠歌さんのワイシャツに出しちやおうぜ……これ意外に興奮するッ……」

「あああああッ、翠歌、翠歌ッ、翠歌ッ、翠歌ッ……」

「ふああああッ、い、いまは……いまだけは私の顔……視ないでえええっ、絶対にヘンな顔してるからッ、ああああッ、視ないで、視ないでッ……視られてるッ……」

波溜くんに挿入れられながら……こんな大勢に視られてるうううッ♥」

「翠歌ちゃんッ、お、俺に集中してよ、いまだけでもッ、おらああああッ!!」

「ひえええ、ごめんなさいいっ、波溜くんッ、そうだよね、ごめんんんッ!!」

私は言うに及ばず、波溜くんも全身を汗で濡らしている。表情からも余裕が粒も無いと分かる。腰を思いつきり逸らせた儘に連続する様子から、もう絶頂が近いと伝わってきた。

「ご、ごめ……も、もうツ……!!」

「んはっ、はあっ、ああっ、う、うんツ、イツて……波溜くんツ、波溜くんツ♥」

「翠歌ちゃんツ、好き……大好き、大好き……ツ、翠歌ちゃん……ツ」

「あああああああッ、ふあああああああああああッ♥」

ドクドクドクツ、ドクツ、ドクツ、ドクツ……!!

空を裂くような断末魔にて互いに果てるのだった。

最後の最後で亀頭が急所を捉えたらしく、またも私は尿失禁へと至ってしまう。

ポルチオから全身へと電流が走り、グルリと私の瞳が反転する。だらしなく開いた口からは涎が垂れており、どう見ても性に狂った女の末路だった。

それを他の男子たちにガン見される羞恥。その羞恥を肴に、またも私の衣服へと射精される屈辱、背徳感。波溜くんから有りっ丈に中出しされる多幸福感……全てが最高の一体感を演出するのだった。

……波溜くんと二度目のキスを経ると、休む間もなく次の相手に移る。

どうやら私は、此処に居る二十人、全員とセックスしなければならぬようだ。

「波瑠とはエッチ出来るのに、俺とは出来ないの？」なんて問われて頷けるような度胸は無い。男子たちも分かっており、波瑠くんとその行為が終わると、次々に手が上がっていった。

「翠歌さん。次は俺がいきます」

「名月くん……」

なにやら話し合う男子たち。暫くして一人が出てくる。馴染み深い顔だった。

二人目は名月くん。二メートル近い体躯に、ちよつと目付きが悪いけど、それが少し格好良くてギャップにもなる優しい性格の男性である。歳は私より二つ下でも、その頼り甲斐から、感覚的にはお兄ちゃんのような存在と言えた。

名月くんとは十年の仲であり、こうして痴態を見せるだけでも恥ずかしいのに、まさか身体を重ねることになるなんて……と、名月くんの下半身をチラツと窺う。

「……………」

絶句する。だって平常時でさえ、ズボンに収まり切らない大ききさだもの。

本人曰く「いまほど興奮した瞬間は無い」らしく、そこは女が本能的に畏怖する曾長の存在感を示していた。

経験の浅い私じゃ務まらないレベルだ。こんなサイズが私の胎内に入る訳が無い。言葉も出せずに毛を逆立てるも、興奮した名月くんに慈悲は無く……

「いきます」

「う、あッ……」

衣服を一枚一枚と脱ぎ捨てていき、ぼとりと最後の一枚も床に落ちた。

やはり期待を裏切らない存在感であり、「すっげ……」と、同僚たちも苦笑いを漏らしている。私の腕くらい太いんじゃないかな……波瑠くんのも大きかったけど、正直言って比較にならなかった。

流石に戸惑う私。手で名月くんの腕を掴む。

「お、大きい、よね……は、入るのかな……」

「ん、まあ。コンプレックスです。男って普通は大きい望みますけど……」

「ものには限度ってモンがあるんスね。デカ過ぎるのも悩みっスか」

「……」

隣に居た波瑠くんが零す。私だけでなく、同性の仲間たちからも引かれたような空気に、興奮していた名月くんから笑顔が消えていく。作業着や正装の上からでも、はつきりと分かるくらい大きいのだ。実業団とかでは、更に苦労してることだろう。入社したての時も、よく年上の先輩たちから揶揄われてきのを視てきた。

険しい私の顔に名月くんが傷付く。私はハツとした。

「やっぱ、止めときますか？」

「……う、ううん。と、とりあえず、た、試してみようよっ……」

「良いんですか？」

「ん、名月くんの……感じてみたいの……名月くんと一緒にになりたいの……」

「うあ……その言葉サイコーです。翠歌さん、大好きです」

「ん……私も……名月くんのこと、大好き……」

「……ッ!!」

ああ、なに言ってるの私ってば。彼氏が居るのに……名月くんのことを……!!
でも、なによりも私は名月くんを傷付けたくなかった。

ソファアからテーブルへと移動した私たち。テーブルの端で卓上正常位の体勢を取るべくM字に開脚すると、オーガズムに炙られた膣が露わとなった。

「うお、すっげ……」

「めっちゃ綺麗だよな、翠歌ちゃんのオマ○コ……」

「あー、早く俺もヤリてえ〜」

「う、ううっ、そ、そんなに視ないで……」

「いや、それはムリ。翠歌ちゃん。こんなエロくて可愛いのにさ」

「ホントに視線に弱いね。触られるのも弱いし可愛い」

「みんなで愛撫してあげるから。翠歌先輩は名月さんのチ○ポに集中して？」

「……………」

「ホント、無理そうだったら、そう言って下さいね」

「う、うん……大丈夫だからっ、来てッ……♡」

そこに巨大な亀頭を宛がう名月くん。拳ほどの亀頭でグリグリと陰唇を突いてる。どうしても悦楽に悶えてしまう私を、四方八方から取り囲む男子たちが優しく取り押さえてくれる。二十人の男が私の全身に手を伸ばしてくる。四肢を拘束しながら、乳房やお腹、脇腹へと手を這っていた。

「んあああああッ、ふあああッ、だ、誰ッ、私の乳首をッ……♡」

「興奮してる瞬間が一番挿入れやすいからな。こうして刺激してるワケ」

「じゃ、俺も協力する。翠歌先輩の乳首……左右両方コリコリしてあげるね♡」

「クリトリスも……翠歌さんのクリトリスおつきいなあ〜」

「おっぱいもデカいしマジで最高っ、マジで彼氏作るとか勿体なさすぎだろ……」

「この身体なら、いくらでもオトコ作れるのにな。第二技術課は勿論、第一、第三技術課のオトコたちも、みんな翠歌さんのこと狙ってんだぜ？ 特定の相手を作る

なんてなあ。責任重いよ？」

「んはあああッ、ああああッ、そ、そんなの、知らない……ああああッ♡」

「んっ、翠歌さん……は、入るッ……も、もう一気にいきます、よっ……」

「んはあああああああああああああああああああああッ!!」

生物として肉体が機能する。如何なる男でも受け入れられるようにと、私の中の「女」が稼働する。名月くんを悦ばせたい一身は、みんなの協力もあって少しずつ巨根に対応していった。

やがて名月くんの全てを享受すると、周囲から歓声が上がる。

「うおー、すっご。絶対ムリと思っただのに。生物の神秘を見た気がする……」

「翠歌先輩あんなデツカいのも啞え込んじゃうなんて。マジで魔性の女ッ……」

「大きさに慣れたってこと？　ちよ、名月くん最後にした方が良かったんじゃない？」

「うあー、比べられたくねえ……なんで名月を二番手にしちゃったんだ……」

などと、一部では絶望の声も上がってるけど……名月くんの耳には入っていない様子である。私の胎内を噛み締めるように静かに息を吐いた。

「はあ、はあ、奥まで挿入ったの……マジで初めてだ。だ、大丈夫ですかッ？」

「ああああッ、んっ、思ったより大丈夫ッ、なつき、くん……ふあああッ♥」

「くうう……翠歌さん……俺いまめちやめちや感動してます。一生愛し続けますッ、

翠歌さんのこと……例え彼氏が居ようともッ……俺もう翠歌さん以外は無理ですッ、

翠歌さんッ、ああああッ、好きッ、大好きですッ……!!」

「はわあああああッ♥　な、名月、くんんん……ッ!!」

私の受容に、よっほど感激だったらしい名月くん。胎内で更なる膨らみを見せる。既にパンパンだったのに……もっと膣がキツキツな過密となっていく。

それでも性交渉を完遂させるべく、抽送を滑らかにしようとする生物学的構造が愛液を急速に製造する。生半可ではスムーズなピストン運動が出来ない……ということ、尋常じゃない量の愛液が迸った。

むろん、初めての感覚である。顔だけに及ばず、全身が紅潮していて物凄く熱い。尚且つ、名月くんの腰が往復する度に蜜壺で氾濫が起こり、結合部からピュルツと愛液の弧が描かれていた。

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ、翠歌さんッ、翠歌さんッ、翠歌さんッ♡ こんな、セックスがこんなに気持ち良かったなんてッ、大好き、好き、好き、好き、翠歌さんッ」

「あああああっ、名月くんッ、名月くんッ、名月くんッ、名月くんッ、名月くんッ♡」

ピュルツ、ブシュツ、ブシュウウツ、ピュルルルルルルルッ……!!

一見すると潮を噴いている光景だけど、これら全て愛液である。愛液を効率的に作る為に、私の身体が強制的に絶頂し続けているのだ。

名月くんの一呼吸でオーガズムに至る私……みんなから一斉に犯された時よりも強い快感を覚えている。他の男子たちも、この圧倒的な愛の交わりに言葉を失っていた。

「ちよっ……!! 俺の時よりも、ずっと気持ち良さそうにして……翠歌ッ!!」

我に返った波瑠くんが嫉妬心を燃やす。明らかに名月くんへと傾倒している私に詰め寄る。名月くんと対するように、テーブルの端へと動いて私を見下ろす。その表情を窺う前に、波瑠くんが私の唇を奪ってきた。

唇を重ねるだけのピュアなキスじゃない。波瑠くんが私の口内へと大量に唾液を投下してきての舌戦。露骨な音を立てたデーブな接吻を迫られた。

「んっ、ちゅっ、んんんっ、ぢゅっ……!!」

「ん、はあっ、んっ、翠歌ッ……やっぱ、大きいのが好きなんかッ……!!」

「そ、そんなこと……ッ、んっ、ふうううっ、ま、待って、息……出来なッ……」

「一突きされる度に、こんなイッて……明らかに俺の時より感じやがってッ、この、翠歌ッ……翠歌に俺の唾液、全部送り込んでやるッ……んっ、ぢゆるるっ……♥」

「あむッ、んっ、ちゅっ、はあ、はあっ、は、波瑠、くん……名月、くんッ……」

ビュルッ、ブシュッ、ブシュウウッ、ビュルルルルルッ……!!

肉棒の往復で二種類の急所が潰される。行きでポルチオを、帰りでGスポットをカリが擦り上げていく。何度も何度もアクメを繰り返させられていく。快感が後を絶たず、絶頂と気絶を交互に強制させられた。

しかし、それを声にすることも叶わない。波瑠くんの激しい舌戦により……

お陰で私は、快感の表現を四肢でしか出来ない。テーブル外に放り出された手と足が面白いくらいにピンと張り、指先をふるふると蠢動させていた。

それぞれを手に取っていく男子たち。今度は、その感触が伝わってきた。

「翠歌ちゃん……♡ よっぽど気持ち良いんだね。でも、もっともっと気持ち良くしてあげるから……んっ、ちゅっ……はむっ、んちゅっ、んっ……♡」

「翠歌ッ……可愛い。リアルでアへってる子、初めて見た。んちゅっ、んっ……」

「翠歌先輩のイク姿……なんでこんなにエロいんだろうな。んちゅっ、ちゅっ……」

ああっ、指先……翠歌先輩の指ッ……美味しい。んちゅっ、あああ、翠歌先輩ッ」

「翠歌さん、好き……足の指舐めてるだけで……イ、イキたいくらい興奮しますッ。」

あああっ、オ、オナニー、止まらないッ、今度は翠歌さんにぶっかけたいですッ」

「あああああああッ、み、みんなの舌ッ、んちゅっ、んんんっ、んんんんんん

んんんんんッ、ああああッ、ぜ、全身がッ、くちゅくちゅされてるのおおッ……

み、みんなに舐められてるうううッ♡」

名月くん一人でもキャパオーバーなのだ。

その上で全身を舐められても、相変わらず脳の処理は追い付かない。けど、このハーレム感は、やはり麻薬のような中毒性があった。

大好きな第二技術課の全員に愛されるシチュエーションが私を最高に狂わせた。

「はあ、はあ、翠歌さんッ、俺もう、イ、イキますッ、イクッ、もうッ……」

「ああああッ、ふああああッ、アアアアッ、名月くんのッ、めちやめちや硬いッ、全身っ掻き混ぜられてるみたいッ、こ、こんな状態で出されたらッ、あッ、ああああッ、お、可笑しくなっちゃうッ……アアアアアアッ!!」

「はあ、はあ、翠歌さんッ、翠歌さんッ、はあ、はあ、好き、好き好きッ、もつと狂っちゃって下さいッ、そのアへ顔……マジで可愛いですッ、幸せにしたいです」

「名月くんッ、ああああッ、名月くんッ、名月くんッ、名月くんッ!!」

「翠歌ちゃんッ、瀬戸さんだけじゃなくて僕らも居るんだからね？ 翠歌ちゃんの指を舐めながら、自慰までして……なのに、瀬戸さんの巨根にばかり善がられると悔しいんだけどッ、んっ、ちゅっ、ちゅっ……」

「最後は俺も出すから。翠歌の身体に……思いつ切りぶっかけてやるッ」

「みんなでぶっかけよう。じゃないと、名月に取られちゃうッ」

「はいッ!! 翠歌ちゃんは全員のモノなんだから……みんなの色で染めないとッ」

「はあ、はあ、はあっ、そうですよ、翠歌さん。分かった？ みんなのアイドルである以上は、愛も平等じゃないとダメですからねッ!! 俺も、みんなに恨まれたくないですから」

「分かった!? 翠歌さんッ!」

「ふああッ、わ、分かんない、分かんないよ……けど、みんなのことは大好きだよ。大好き……んっ、ふああああッ、好き……好きッ、ああああああッ!!」

「ああああッ、出るッ、ああああッ、翠歌さんッ、翠歌さんッ!!」

「俺らも出すぞ、一斉にッ、ああああッ、ああああッ!!」

ドピュルルルルッ、どぷっ、ぬぷっ、ピュルルルルッ!!

最後は、全員で仲良く絶頂の賛歌に馳せた。

名月くん……そのサイズに相違ない量の精液を肉壺へと注ぎ込んだ。

身体が発射されるかと思った。正しく爆発したように、膣内で名月くんの亀頭が弾ける。桁外れの射精にて一瞬で子宮が満たされては、ペニス蓋をしてる所為で胎内にも氾濫してしまい、全身が燃えるような享楽に溺れていた。

海老のように背中を反ってピチピチと卓上で踊る私に、更なる怒濤が押し寄せる。私をテーブルごと包囲していた十九人の男子までも一斉に射精する。亀頭の照準を私に向けながら……私の肉体を舐めながら……私の全身に限なくオスを吐き出すのだった。

「あ、ああッ、あッ、ああああッ、あッ……」

まるで私を第二技術課の色に染めるが如く。まずは、波瑠くんと明良くんが私の顔面に放ち、それに続くように他の男子も次々に私を穢していく。

何度も、何度も、何度も……

五分くらいの間。断続的に盛大な円弧の潮が男子たちを濡らしていった。

まるで精液に対するお返しのように……

今度は、私が二十人の男子たちを私の色へと染めてやるのだった。

……

……

……

楽しい時間はすぐ終わるって言うけど……今夜に限って、そんなことはなかった。

破天荒な潮噴きを数分間に渡って何十回も繰り返す以上のフィナーレなんて有り

得ない。流石にもうお開きだろう……と、寂しさすら感じていたのは私だけであり、

名月くんの後も当たり前のように行為は連続していった。

誰も、不平等な愛は求めていないのだ。

誰か一人とエッチをすれば、他のみんなとも等しくエッチをしなければならぬ。

よって私は、一晩できっちり二十人を相手にしたのだった。

昨日まで私の経験人数は二人だったのに……一気に十倍に増えるなるなんて……

しかも、恋人が居る身なのに。彼氏に罪悪感を覚える複雑な心境だけど、それを

遥かに上回る幸福感がすぐに私を払拭させてきてしまう。

「はあ……」

「どうしたの、翠歌さん？」

「ん……」

波瑠くん、明良くん、名月くんが私に話し掛けてくる。

どうやら掃除は終わったらしい。エリートの技術者集団というだけあり、流石の仕事術によってパーティールームは、あっという間に片付けられていた。

あれだけ体液とかで汚しまくっていたのに、来た時よりもずっと綺麗になってる。綺麗にならなかったのは、せいぜい私が着ている衣服くらいだ。

あれからも隙あらば男子たちが私のワイシャツとかに射精してくれて……お陰で男臭に塗れた服を着る羽目になっている。ベツトリしており、鼻を近付けなくても酸っぱい臭いが感じられる。けど、不思議と不快感は無かった。

ある程度の体力が回復したものの、未だ高揚感が脳を駆け巡っている状態である。私が黙って余韻に浸っていると、みんなが集まってきた。

私の、愛するヒトたち……

「最後に歌って下さいよ。せつかく来たんですから、一回くらい」

「えー、フリータイムも、もう終わりの時間だよ？ 朝だもん」

「一曲を歌うくらいの時間は有りますって。お願いですから♪」

「俺も聞きたいです、翠歌ちゃんの歌声……」

「素直に、綺麗な声だもんなあ。翠歌さんの声って」

「うんうん。意外と完璧超人なんだよね」

「お願いしますよ、一曲だけでもっ!!」

「もお、分かったから。一曲だけねッ……」

「流石ッ、大好き翠歌ちゃん♥」

「そういうの、もう良いからッ。じゃ、歌うけど……歌ってるトコ視るの無しね」

「ハイハイ、リョーカイ」

仕事終わりに寄ったカラオケも、既に朝を迎える頃合いだ。

退室時間が残り十分に迫り、明良くんがマイクを渡してくる。

渋々と……でも、朱い顔に笑みを漏らす私。マイクを受け取って選曲した。

あれだけ拒んでたのに……いまは、歌いたくて仕方なかった。

歌ってる所を視られるのは恥ずかしいから視ないでね……って言ったのにッ……

分かってはいたけど、私が歌い始めると男子たちは一斉に注目してきた。

歌っている無防備な姿をガン見してくる。やはり注目されるのは恥ずかしかった。

でも、楽しい。心が弾んでしまう。私の両脇には名月くんと明良くんが居て……

波瑠くんや、他のみんなに囲まれて……私の心は、幸せを謳歌していた。

こうして私の「第二の人生の幕」は切って落とされた。

相手は全員が職場の同僚である。暫くは、気まずいような、照れるような空気が流れるだろうけど、そのうち自然と元の状態に戻っていくのかな。と、私は漠然に考えていた。

しかし、一晩の過ちというには規模が大きすぎた。

この過ちについて私は、今後その代償を快楽的に背負い続けることになる……